

# 女子大学生の母娘関係と対人不安の関連

—質問紙調査および円環イメージ画を用いて—

18011PCM 安江 佐桃実

## I. 問題・目的

母娘関係について：現代の我が国において、母娘関係は「一卵性母娘」と言われるほどに親密化している(小高, 2015)。母への親和志向的な関係は他者との調和的共存や社会適応と関係している(小高, 2015) 一方で、母親との親密性を心理的距離として捉えた場合、それが近いと心理的依存が起りやすい状態になるとも考えられる(金子, 1989)。臨床事例においては、共依存的でネガティブな面が強調され、娘が支配感や依存性、息苦しさを持ち、それが精神的適応の低さに繋がるケースが指摘されている(信田, 2008; 斎藤, 2008; 高石, 1996)。

青年期の発達の主題はアイデンティティの確立であり親から心理的に自立する時期であるが、1980年代に入ると、心理的分離を親との良好な関係を維持しながら個性化する方向へと進んでいくものとして捉える研究が現れた。親との関係をうまく保ち親和的になりながら、親とは別の個人として自信をもち、親とは異なる独自の生き方を志向することで、心理的自立が達成されること(小高, 2015) が示されている。

対人不安について：青年期は他者との触れ合いの中で自分とは何かという問いを模索しつつ自己への意識が高まると共に、対人関係における不安も高まってくる(森下・三原, 2015)。鍋田(2004)は、対人恐怖に影響を及ぼす要因として母子関係を挙げており、その特徴として、庇護されたり特別扱いを受けたりして過剰気味に快い状態におかれた母子の融合した状態を指摘している。そして子供は愛情を供給する母親に対して受身的な態度であることを述べている。

そこで本研究では、心理的距離が近い母娘関係において、母親からの心理的分離の有無で対人不安に差が生じるかどうかを検討することを目的

とする。

## II. 研究1

### 1. 目的

心理的距離が近い母娘関係において、母親からの心理的分離ができていない人とそうでない人の間では対人不安の大きさに差が生じるのではないかと考え、その関連を質問紙調査によって検討することを目的とする。

仮説：①LL (心理的距離近・心理的分離×) 群はLH群 (心理的距離近・心理的分離○) より対人不安が有意に高くなるだろう。②LH群は他の3群より対人不安が有意に低くなるだろう。

### 2. 方法

対象：分析対象はA大学の女子大学生203名  
質問紙：①フェイスシート②心理的距離尺度(金子, 1989) ③心理的分離を測定する尺度(精神的自立尺度(水本ら, 2011)の下位尺度「母親からの心理的分離」5項目に、親密性尺度(水本, 2016)の下位尺度「母親の価値観へのとらわれ」5項目を逆転項目として加えたもの)④対人不安意識尺度(嶋野・鈴木・菅原, 2004)

### 3. 結果と考察

心理的距離と心理的分離を平均値で高群・低群に分け、各尺度高群・低群を組み合わせた4群を独立変数、対人不安意識を従属変数とする一元配置分散分析を行った。その結果、4群間に有意な差が示された( $F(3,199) = 12.24, p < .001$ )。引き続きHSD法による多重比較を行ったところ、LH群はLL群( $p < .01$ )、HL群( $p < .001$ )、HH群( $p < .05$ )よりも対人不安意識尺度得点が有意に低く、LL群はLH群よりも対人不安意識尺度得点が有意に高いことが示された( $p < .01$ )。このことから仮説①②は支持された。LL群は心理的分離が出来ておらず母親に対して受け身的であると考えられるため、自我のめざめによって

生じる母親への反抗を母親からの愛情があるがゆえに抑圧してしまうことで潜在的な敵意が生じ、それが対人不安に繋がるのではないかと考えられた。また、LH群は母親との間での親密で理解し合った関係を持ちながらも母親と異なる自己を築くことができているため母親とは違う自分を理解してもらっているという安心感をもつことができていると考えられる。そのため、精神的エネルギーを本来の自己の成長のために使うことができ自信のなさや不安に繋がりにくく、対人不安が低くなるのではないかと考えられた。

### III. 研究2

#### 1. 目的

研究1で検証された仮説①②に基づき、LL-H(対人不安高)群とLH-L(対人不安低)群に分類された各調査対象者の母娘関係の特徴を面接と円環イメージ画によって事例的に検討することを目的とする。

#### 2. 方法

対象：研究1に参加した者の内承諾を得た7名。  
手続き：A4の白紙、鉛筆、消しゴムを用いて円環イメージ画を行った後、面接調査を実施した。

#### 3. 結果と考察

##### LL-H群

Aさん：幼い頃の母親の統制的な関わりによってこころの世界に良い子でいなければ怒られてしまうという母娘関係がつけられ、母親の顔を窺い協調的でいようとする母娘関係が窺われた。Bさん：母親のせいで恥をかいた幼い頃の経験が母親への不信感に繋がり、母親の領域内にいることへの不安や抵抗の強さに繋がっているのではないかと考えられた。Cさん：本人の自己愛が満たされる母子融合の関係性があり、分離不安があると考えられる。そのため、快い状態に留まろうと母親の言うことに従おうとしているのではないかと考えられた。

##### LH-L群

Dさん：母親とほどよい繋がりを保ちつつ母親の存在を大きなものと感じることが安心感に繋がっていると考えられる。それが分離不安の低さに繋がり心理的離乳の準備が進められているので

はないかと考えられる。Eさん：母親を一人の人として認識し、同情や共感をすることができている。このような母親への親密性が母親との関係性を保ちながら、分離・独立していくことに繋がっていると考えられる。Fさん：家族とのコミュニケーションの場の多さが頼りやすい環境や関係性に繋がっているようである。自立の準備をしながら困った時には助けを求められる安心感があると考えられる。Gさん：この群の中で唯一上下の円を描いたが、母親への信頼感、尊敬の念が窺われる。困った時に頼れるよう母親に応援してもらえる状況を望む様子からは、母親との関係性を維持しながら分離・独立しようとしている姿が窺われるようである。

### IV. 総合考察

研究1では仮説①②が支持され、研究2では仮説に基づきLL-H群とLH-L群の母娘関係の特徴について詳細に検討した。その結果、LL-H群には、母親に息苦しさや圧迫感を抱いているという共通点が窺われた。母親への安心感が乏しいことで最接近というアンビバレンスにもちこたえることが出来ず个体化を妨げられていると考えられる。そのため母親に対して受け身的に関わらざるを得ないが、その背景には母親への反抗心等の気持ちが存在しているため、それが対人不安意識の高さに繋がっているのではないかと考えられた。対してLH-L群では、母親に安心感や信頼感を抱いているという共通点が窺われた。そのような母娘関係は否定的な意味を前提とした親への「情緒的依存」ではなく、肯定的意味を前提とした親との「絆」(渡邊, 1997)があると考えられる。また、母親と対等に接することが出来ているという認識が母親とは異なる自己を築くことが出来ているという感覚に繋がっているのではないかと考えられる。母親とは違う本来の自分を理解してもらっているという安心感によって精神的エネルギーを本来の自己の成長のために使うことができ、自信のなさや不安への繋がりにくさが対人不安の低さに繋がっているのではないかと考えられた。